

自利利他の精神で、

命を守る

病気が治らなくても、
みんなが幸せになれる医療を

真生会富山病院

真鍋恭弘院長にインタビュー



真生会富山病院
真鍋恭弘院長

「医師も看護師も職員も、とても優しく、親切だ」という評判が高まっている病院が、富山県射水市にあります。仏法に説かれている自利利他の精神に基づき、安心と満足の医療を目指す真生会富山病院です。その取り組みは海外からも注目され、各国から医療関係者が、毎年のように



真生会富山病院（富山県射水市）

視察や研修に訪れています。人種や国を超え「平等でかけがえない尊い命」を守るための交流が、真生会富山病院を舞台に続いているのです。真鍋恭弘院長は、

「今、求められているのは、病気が治らなくてもみんなが幸せになれる医療です。私たちは、どんな人にも誠心誠意の医療を精一杯行います。治らない患者さんでも笑顔になれるまであきらめません」と、方針を語ります。

超高齢社会に突入した今、医療の現場では、どんなことが課題となっているのでしょうか。真生会富山病院が目指す医療について、真鍋院長にインタビューしました。

（聞き手 山崎豊）

医療の目的は幸福であり、 病気を治すことではない

—— 真鍋院長は、「医療の目的は、病気を治すことではない」とおっしゃいますね。意外な感じを受けました。

真鍋 医療は、めざましい進歩を遂げ、多くの病気を克服してきました。それは素晴らしいことです。

しかし、まだ、治すことのできない病気はたくさんあります。治らない病気で苦しみ、生きる意味を見失っている人が、非常に多いのが現実です。病気を治すことだけが医療の目的になっていたら、どうなるでしょうか。

治る見込みのない患者さんには、「もう、これ以上は、医療の施しようがありません」と言っ、て、見放してしまいうケースも出てくるのではないのでしょうか。

—— 実際に、そのようなことが起こっていると思います。

真鍋 医療の目的は、患者さんを幸福にすることです。

「病気が治らなくても、みんなが幸せになれる医療」が求められているのです。

—— 真生会富山病院では、どのように取り組んでおられるのですか。

真鍋 病院の基本方針として、「患者の皆様と共に笑顔のあふれる病院を目指します」と掲げています。

この中には、「治らない患者さんでも笑顔になれる病院を目指しましょう」という意味が含まれています。

ガンという病気ひとつをとっても、二人に一人は治りません。治らない患者さんと、どうしたら共に笑顔になれる

「患者さんの幸せが、 そのまま私たちの幸せに」

—— 「医療の目的は、患者さんの幸福」と、はっきり打ち出すことは、大切なことなのですね。

のか。私たちには真剣に取り組んでいく義務があります。

そのためには、まず、生命の重さを心から尊重する気持ちをもち、患者さん、ご家族に寄り添い、共感し、サポートしていくことに努めています。

「あなたたちに会えて幸せだった」と共感の笑顔を頂けるような病院、医療スタッフになりたいと思っています。

真鍋 ところが、どこの病院でも、簡単にできることではないのです。なぜなら、これまでの医療



誕生月別交流会で集まった病院職員。誕生月別交流会とは、同じ誕生月の職員が集まり、互いの誕生日を祝いながら親睦を深める催しです。初めて顔を合わせる職員でも、自然と仲良くなり、その後、顔を見たら気軽にあいさつを交わせるようになります。



1月の能登半島地震の際、医療救護班として現地に出勤したメンバーです。危険を伴う活動ですが、自利利他の精神を発揮し、重要な任務を果たしてきました。メンバーの一人は「被災者の方々と心の交流や活動チームの絆は、この先も忘れることはない大切な宝物です」と、貴重な体験を語っていました。

仏法精神に基づいた 医療の3つの柱

1 生命の尊厳

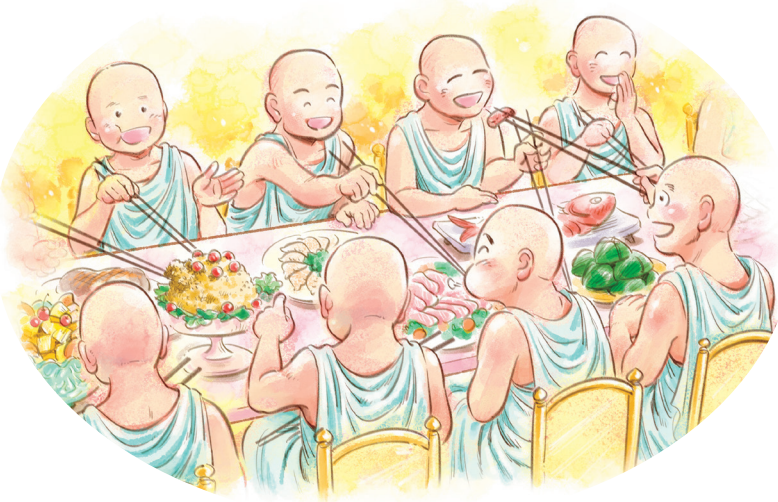
2 目的は幸福

3 自利利他の精神

は、「人々を健康にする」ことに力を尽くしてきましたが、「どうしたら幸福になれるのか」という、一番大切なことを考えることがなかったのです。

ですから、患者さんの幸福を大切にする医療を根底から支える「哲学」や「思想」を導入しないかぎり、実現させることはできないのです。

極楽 自利利他



我利我利の根性丸出しである。
次に、男は、極楽へ向かった。
夕食の時間らしく、極楽に往生した人たちが、食卓に仲良く座っていた。

もちろん、料理は山海の珍味である。
「極楽の人は、さすがに皆、ふくよかで、肌もつややかだな」と思いながら、ふと箸に目をやった。なんと、それは

地獄 我利我利



イラスト・黒澤葵

地獄と同じように一メートル以上もあるではないか。
「いったい、地獄と極楽は、どこが違うのだろうか？」
男は、ますます分からなくなってしまった。

「ありがたいございました。今度は、お返ししますよ。あなたは、何がお好きですか」と、自分にも食べさせてくれる。自利利他の精神で相手思いやり、実に楽しい食事風景であった。
男は、「なるほど、極楽へ行っている人は、心がけが違いうわい」と言って感心したという。

◆ ◆
自利利他の精神で実践する医療においては、「他」とは

真生会の理念

仏法に説かれている
「自利利他」の精神に基づいて、
安心と満足の医療をめざします。

真生会富山病院は、仏法に説かれている自利利他の精神に基づく医療を実践されているのです。

真鍋 はい。人は生きている限り、老いや病や死から逃れることはできません。

しかし、たとえ老いや病の苦しみの中にあっても、死を前にしても、幸せになれると教えられたのが仏教です。自

利利他の精神に基づいて医療を行うことによって、病気が治らない人でも、「よい人生だった。人間に生まれてきてよかった」と、心から言えるようになる時が来ると信じています。

昔、日本の寺は、病院や福祉施設の役割も担っていました。病氣の人には薬を与え、生きる意味が分からず苦しんでいる人には仏の教えを説いてきました。これが、これらの時代に求められる医療の姿だと思えてならないのです。

医療を実践するうえで、大切な、自利利他の精神とは、どのような教えでしょうか。

真鍋 自利利他の「利」とは「幸せ」という意味です。「自利」は自分の幸せ、「利

他」とは自分以外の人の幸せのことです。

ですから自利利他とは、他人の幸せにする（利他）ことが、そのまま自分の幸せになる（自利）ということです。反対に、自分さえよければ

他人はどうでもよいという考え方を、「我利我利」といわれます。

自利利他と我利我利の違いについて教えられた例え話がありますので紹介しましょう。

◆ ◆
昔、ある所に、地獄と極楽の見学に出かけた男がいた。

最初に、地獄へ行ってみると、そこはちょうど昼食の時間であった。

食卓の両側には、罪人たちが、ずらりと並んでいる。

「地獄のことだから、きっと粗末な食事に違いない」と思っている男がテーブルの上を見ると、なんと、豪華な料理が山盛りではないか。それなのに、罪人たちは、皆、ガリガリにやせこけている。

「おかしいぞ」と思って、よく見ると、彼らの手には非常に長い箸が握られていた。おそらく一メートル以上はあるだろう。

その長い箸を必死に動かして、ご馳走を自分の口へ入れようとするが、できるはずがない。イライラして、怒りだす者もいる。それどころか、隣の人が箸でつまんだ料理を奪おうとして、醜い争いが始まったではないか。まさに、自分さえよければいいという

しかし、その疑問は、まもなく氷解した。

彼らは、長い箸でご馳走をはさむと、「どうぞ」と言っていて、自分の向こう側の人に食べさせ始めたのである。

さも満足そうな相手は、

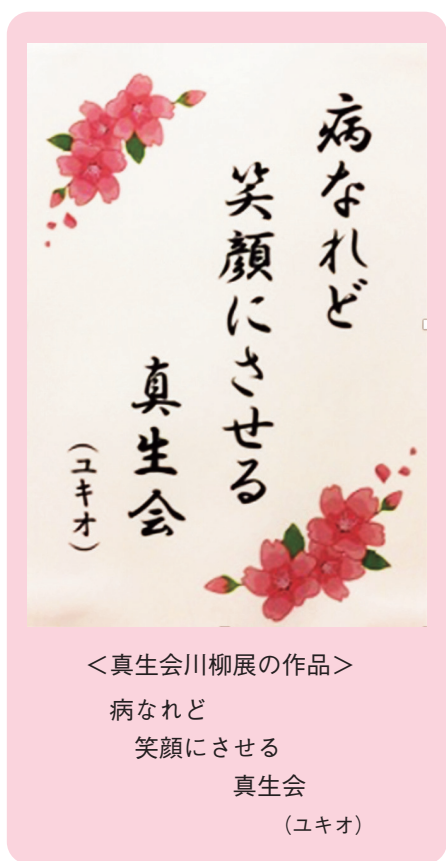
「ありがたいございました。今度は、お返ししますよ。あなたは、何がお好きですか」と、自分にも食べさせてくれる。自利利他の精神で相手思いやり、実に楽しい食事風景であった。

男は、「なるほど、極楽へ

行っている人は、心がけが違

うわい」と言って感心したと

いう。



患者さんにあたります。 「私たちが提供する医療を通して、患者さんに幸せになっていただく。それが、そのまま私たちの幸せになります」という気持ちで取り組んでいます。

「真生会の皆さんは、優しく、親切だ」という声を多く聞きます。自利利他の精神を実践されているからですね。

真鍋 そのように言っていたくのは、とてもうれしいことです。仏教の、自利利他の教えから出てくるのが、「親切第一」という精神と、「思いやりの心」です。

人が社会の中で支え合って生きていくうえで、親切は、とても大切なことです。

困っている人がいれば、その人の身になって、親切をすることで、心の通い合う世界を作ることができます。医療においては、特に親切が重要です。なぜなら、病院に来る人は、皆さん困っている人だからです。

病気による体の苦しみで困っている人、病気に対する心配で困っている人、何をどうしたらよいか分からず困っている人、さまざまな理由で困っている人ばかりです。

しかも、病人はいつも弱い立場にあるので、自分がしてほしいことを遠慮して言えなかったり、自分がしてほしいことが分からなかったりします。

患者さんが求めていること

を、口に出して言ってもらうまで動けないようでは、医療者として務まりません。患者さんの心と体の苦痛を思いやっ、行動すること、「私のしてほしいことはこれだったのだ。この人はなぜ気がついたのだろう。親切な人だ」と喜んでいただくことができます。

私たちは、そんな親切第一をモットーとする医療者になりたいと努力しています。

「真生会のマークには、

しょう」という願いです。すべての出発点は、みんなの幸せを願う私たちの強い想

いです。多くの皆さんの健康のために、「We」の心を育んでいきたいと思っています。

治る見込みのない人でも、 延命に意味がある

そして、「We」には、もう一つの想いが込められています。それは、「患者さんやご家族、さらに私たち職員も含めて、みんなが一つの家族のように、一緒に幸せになりま

「人間の命は、地球よりも重い」といわれます。しかし、病院によっては、高齢者の命と、若い人の命の重さを、平等に見ていないのではないかと、疑問を感じることがありました。

父が倒れて救急車で救命救急病院へ運ばれた時のことです。一人の医者が、「私が主治医をさせていただきます」とあいさつに来て、こう言いました。

「お父さんは八十四歳にもなっておられますし、これから先に、何か、まだすることがあります。もし、このあと急変されたら、延命措置はどうしますか」

私は、この医者は、なんと無神経なことを言うのかと思いました。

「もちろん、最善を尽くしてください」
と答えると、医者は、「心臓マッサージをすると、

高齢の方は肋骨が折れます。それでもいいですね。いったん人工呼吸器を装着すると死ぬまで何年もつけたままになります。そこまでして延命されますか。意識のないまま、ずっと寝たきりになることもありますよ」

と言ってきました。まるで、延命させないように誘導していくのです。

真生会富山病院では、高齢者の延命を、どのように考えておられますか。

真鍋 若い人の命も、高齢の人の命も、平等に尊いのです。どんな人の延命にも意味があります。治る見込みのない人の延命も、わずか一秒の延命であっても意味があります。仏法精神に基づく医療を実践

している私たちは、「八十歳や九十歳の人を治したところでたいしたことはない」とか、「あの人はもう治らないからいいかげんに……」などとは絶対に言いません。患者さんの幸せだけを願っています。

—— 高齢者への延命治療を避ける傾向があるのは、医療費の増大が、国の財政を圧迫しているからでしょうか。



診察中の真鍋院長

真鍋 国が負担する高齢者の医療費は、若い人の何倍にもなるので、「どうせやがて死ぬのに、高いお金を出して、税金を使ってまで延命するのは、どうだろうか？」という医療関係者もいます。

また、はつきり口に出さな
いまでも、「平穏死」が一番
いいという意見もあります。

—— 平穏死とは、どういう
ことでしょうか。

真鍋 安楽死とは違いますが、
命に限りがある状態になった
ら、人工呼吸器や高い薬を使
わずに、自分の寿命だと思っ
て静かに死んでいったほうが
いい、という考え方です。

また、将来、自分が病気で
心臓や呼吸器が停止した時に、
延命治療を希望するか否かを



人工呼吸器をつける状態であ
っても、命の尊厳は失われ
ない

生前に皆で話し合う取り組み
が推進されています。

皆、周りの人に迷惑をかけ
たくないと思いますし、そこ
までして生きたくないという気
軽に考え、「延命治療を希望し
ない」と記し、サインする人
が非常に多いのです。

元氣な時には、
「気管切開し、人工呼吸器を
つけて寝たきりになるのは嫌
だ。そんな尊厳を失った状態
で生きていくのは意味がない。

「自分では日常生活動作がま
ったくできなくなり、全介助
で経管食を使い、みなに支え
られている状態であっても、

だから私は延命治療を受け
たくない」
と思いやすいのですが、人工
呼吸器をつけて寝たきりにな
ると人間としての尊厳を失う
と考えるのは間違いです。

難病の患者さんを多く診療
されている中島孝先生（国立
病院機構新潟病院院長）は、
「自分では日常生活動作がま
ったくできなくなり、全介助
で経管食を使い、みなに支え
られている状態であっても、

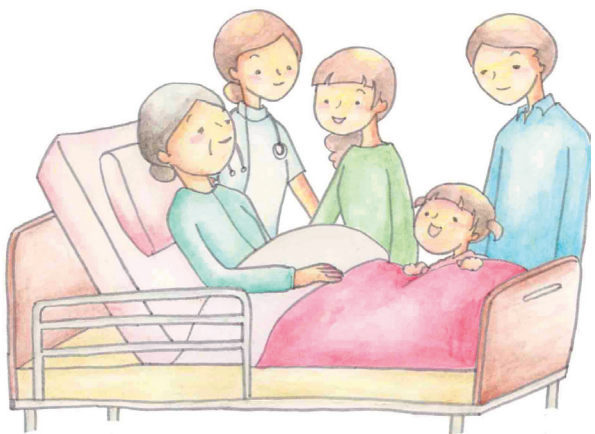
* 経管食……自分の口から食事を取れなくなった人に対し、鼻や口から胃に管を挿入し栄養を与える方法

人間は対等な尊厳をもち、幸
せになりうると考えます」
とおっしゃっています。

生まれつき難病であったり、
人工呼吸器をつけないと生き
ていけない人でも、幸せにな
っている事例をたくさん見て
おられるので、このように断
言されているのです。

最初は、人工呼吸器をつけ
ることに抵抗があった患者さ
んでも、いよいよよとなって、
人工呼吸器をつけてみると、
「つけてよかった。十分、自
分らしく生きていける」と、
笑顔になられるのです。

「人工呼吸器をつけたら、も
う人間の幸せはない」と考え
るのは間違いだと、多くの方
に分かってもらいたいと思っ
ています。



—— 高齢の親が、病で意識
がない状態になった場合には、
家族は、もう何もできないの
でしょうか。

看取りの場（終末期の医療）は、

大切な未来づくりの場

真鍋 最後の瞬間まで命の尊
厳は低下しません。ご家族に
「お父さん、お母さんが生き
ていてくれるだけで私たちは
幸せ」という気持ちがあるの
であれば、その方は家族と共
に幸せな時間、立派な人生を
送っておられるのです。

看取りの場（終末期の医
療）は、大切な未来づくりの
場でもあるのです。亡くなら
れる方がご家族に言い残した
いことを伝えたり、ご家族が
亡くなられる方への思いを伝
えたりする最期の場面です。
その深い心の交流が、次の世

代の人が生きていく大切な礎
となり、ずっと続いていく未
来が作られます。

病気が治らないから、何も
することがないということ
は決してありません。

その大切な未来づくりを支
援するのが私たち医療従事者
の役割であり、ご家族の皆さ
んの人生を支えるのが、役目
だと思っています。

—— 真生会富山病院が、い
かに自利利他の精神に基づい
た医療を実践されているかが、
よく分かりました。真鍋院長、
ありがとうございました。